http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.303　13/12/18

ユージン・スミスと水俣

ユージン・スミス（William Eugene Smith）はアメリカの写真家である。1971年から1974年にかけて水俣に滞在し、水俣の現状を写真に記録した。その作品集「MINAMATA」の中でも、特に有名なのが「Tomoko Uemura in Her Bath」（日本では「入浴する智子と母」）である。ミケランジェロのピエタに例えられるその画像は、深い感動を呼び起こす。

この画像にまつわる話を含め、彼の水俣における活動を調べた評伝が『ユージン・スミス　水俣に捧げた写真家の1100日』（山口由美、小学館）である。第19回小学館ノンフィクション大賞を受賞したこの著作、ちょっと食い足りない部分もあるが、涙無しでは読めない素晴らしい作品である。その中から、水俣の過去をよく伝える部分を引用しよう。

＊

溝口家は、祖父母の代に対岸の天草から水俣にやって来た。ユージンたちが暮らした家は、もともと彼らの隠居部屋であった。

忠明・マスエ夫婦には、長女の恭子を筆頭に男二人女四人の子供がいた。戦前は満州に渡り、満鉄で働いていた忠明。戦後に引き上げてからは、大工の仕事をしていた。

トヨ子は下から三番目になる。生まれた時から体が弱く、母のマスエは、心配して栄養をつけさせようとした。このあたりで「栄養をとる」といったら魚介類をおいてほかにない。水俣病が発生した頃、原因不明の奇病は、しばしば栄養失調などと誤診され、貧しい人々は、ことさらに病気の者に魚介を食べさせて、病状を悪化させた。もともと、あまり米がとれず、魚を主食代わりに多食する習慣があった土地柄である。水銀汚染が始まってからは、ふらふらして水面近くに浮上してくるボラなどが簡単に捕まえられたから、そうした汚染魚をさらにたくさん食べたのである。

「元気にさせたかったのよ。だから母がいっぱい食べさせたとですよ。毒とわかっていないものだから。私は妹ほどは食べてないもの。生牡蠣やら刺身やら。クロガイっていう貝があってね、カラスの羽みたいに真っ黒で、ここらへんではカラスガィって呼ぶんだけど、大根なんかと味噌汁にすると、おいしかったの」

長女の恭子は、トヨ子とは一二歳違い。妹をいつも背負って、時には学校も休んでお守りをした。発病は公式には五歳とされているが、体が弱かったということは、それ以前から病気の兆候があったのだろう。トヨ子にお金がかかるものだから恭子は進学をあきらめた。これも患者の家ではよくあった話である。